

木簡研閱

第一五号

木簡研閱

第一五号



木
簡
學
會

題字
藤枝
亮
刻

目 次

卷頭言

早川庄八 i

一九九二年出土の木簡

1

概要
凡例

西山良平 1

京都・勝龍寺城跡

岩崎誠

奈良・平城京跡

森公章 8

京都・平安京跡・旧二条城跡

土橋誠

奈良・平城京左京三条三坊三坪
奈良・藤原宮跡

原田憲一郎 11

京都・鳥羽離宮跡
大阪・大坂城跡

会下和宏

奈良・平城京右京三条二坊三坪
奈良・藤原宮跡

西崎卓哉 20

積山洋・黒田慶一・清水和

鳥居信子・豆谷浩之

奈良・藤原京五条四坊
奈良・丹切遺跡

竹田政敬・和田萃 26

大阪・大坂城下町跡

松尾信裕・積山洋・清水和

京都・長岡京跡(1)

柳澤一宏 34

積山洋・黒田慶一・清水和

伊藤鈍・鳥居信子・豆谷浩之

京都・長岡京跡(2)

小田桐淳 36

大阪・喜連東遺跡

佐藤隆・久保和士

京都・中海道遺跡

秋山浩三・清水みき

大阪・平野環濠都市遺跡

中村博司

滋賀・鴨田遺跡

北村圭弘 42

兵庫・袴狹遺跡(内田地区)

中西克宏・菅原章太

44

72

42

69

36

67

34

65

22

56

26

56

20

53

11

56

5

45

49

47

47

45

1

i

三重・六大B遺跡	中村光司	73	新潟・八幡林遺跡	田中靖
三重・安養寺跡	大西素行	75	新潟・猿ノ前遺跡	金子正典
三重・宮の西遺跡	春日井恒	77	新潟・馬場天神腰遺跡	品田高志
三重・赤堀城跡	鈴木敏則	79	石川・乾遺跡	藤田邦雄
静岡・尾子遺跡	花井千幸	78	石川・宮永ほじ川遺跡	木田清
岐阜・城之内遺跡	内堀信雄	83	富山・北高木遺跡	安念幹倫
山梨・二本柳遺跡	小林健二	85	廣島・山崎遺跡	河野龍彦
群馬・二之宮東遺跡	坂井隆・高島英之	88	徳島・中島田遺跡	山下知之
群馬・安養寺森西遺跡	飯田陽一	91	愛媛・久米屋田森元遺跡	西尾幸則
群馬・世良田謙訪下遺跡	三浦京子	93	福岡・朝音寺跡(南門跡)	倉住靖彦
福島・小茶門遺跡	吉田生哉	95	福岡・脇道遺跡	井上信正
福島・番匠地遺跡	矢島教之	97	佐賀・城原三本谷南遺跡	桑原幸則
宮城・瑞巖寺境内遺跡	新野一浩	99	宮崎・妻北小学校敷地内遺跡	近藤協
一九七七年以前出土の木簡(一五)				
福井・一乗谷朝倉氏遺跡(第九次)	佐藤圭	133	京都・長岡宮跡(宮第三・三三次)	清水みき
広島・草戸千軒町遺跡(第五・六・八次)	下津問康夫	137	132 122 120 119 117 116 113 111 109 108 106 104 101	

目 次

京都府相楽郡木津町鹿背山郷の表上札	田 中 淳一郎
彙 報	
『木簡研究』一一〇五号総目次	

186
197

181

凡例



欠損文字のうち字数の確認できるもの。

欠損文字のうち字数が推定できるもの。

前後に文字のつづくことが内容上推定されるが、折損等により文字が失われているもの。

一、以下の原稿は各木筒出土地の発掘機関・担当者に依頼して、執筆していただいたものであるが、体字および篆文の記載形式等についても編集担当の責任において調整した。

一、遺跡の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、篆文の漢字はおむね現行常用字体に改めたが、「實」「證」

「龍」「廣」「盡」「應」等については正字体を使用し、異体字は

「井」「井」「季」「林」等についてのみ使用した。

一、篆文下段のアラビア数字は木筒の長さ(文字の方向)・幅・厚さを示す単位はミリメートル。欠損している場合の法量は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木筒の通し番号は最下段に示した。

一、篆文に加えた符号は次の通りである(六頁第1回参照)。

「—」 木筒の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す(端とは木目方向の上下両端をいう)。

「<」 木筒の上端・下端に切り込みのあることを示す。

「—」 木筒の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す(端とは木目方向の上下両端をいう)。

「—」 木筒の上端・下端に切り込みのあることを示す。

「—」 木筒の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す(端とは木目方向の上下両端をいう)。

「—」 木筒の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す(端とは木目方向の上下両端をいう)。

「—」 木筒の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す(端とは木目方向の上下両端をいう)。

○ 穿孔のあることを示す。

△ 抹消により判読困難なもの。

合点。

本筒の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

校訂に関する注で、原則として篆文の右傍に付し、

本文に置き換えるべき文字を含む場合。

文字の上に重書して原字を訂正している場合、訂正箇所の左傍に・を付し原字を上の要領で右傍に示し

た。

カ 筆者・編者が加えた注で疑問の残るもの。

マ、 文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

ラ、 中間の文字が不明なもの。

ル 同一木筒と推定されるが、折損等により直接つなが

らぬ、中間の文字が不明なもの。

△ 地形図は原則として国土地理院発行の五万分の一地形図を使用し、図名を()内に示した。地図中の▼は木筒の出土地点を示す。

一、訣文の最下段に三桁で示した型式番号は、木筒の形態を示し、つきの一五型式からなる（七頁第2圖参照）。

011型式

短冊型。

015型式 短冊型で、側面に孔を穿ったもの。

019型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。

021型式 小形矩形のもの。

023型式 小形矩形の材の一端を主頭にしたもの。

031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいたもの。方

頭・主頭など種々の作り方がある。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいたもの。

033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいたり、他端を尖らせたもの。

039型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

059型式 長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

061型式 用途の明瞭な木製品に墨書きのあるもの。

055型式 用途未詳の木製品に墨書きのあるもの。

081型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

091型式 刃削。

広島・草戸千軒町遺跡出土木筒の型式番号は、広島県草戸千軒

町遺跡調査研究所『草戸千軒一木筒』を参照された。なおその他の中・近世木筒については以上の型式番号に適合しないものが多いので、注記を省略したものもある。

付表使仍ぬ如前
×位下財株人安万呂

×行夜使仍注状故移



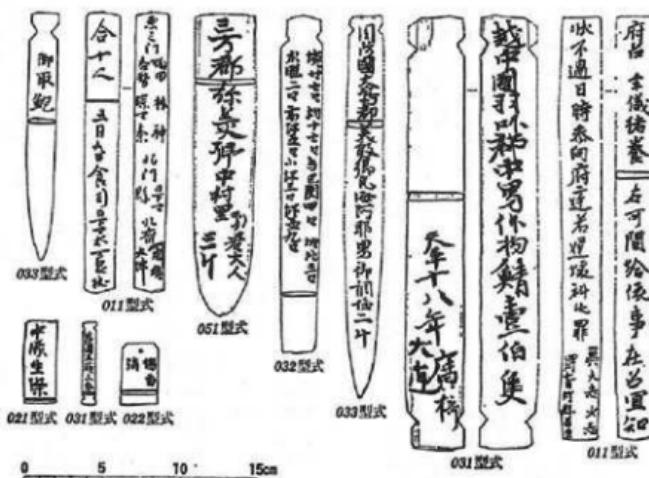
「衆進上材十二条中 桁一条 又八条×」

「
武藏國男衣郡余戸里大賛政一斗天平十八年十一月」

「
諸食番長二人
金人十七人
左作例四種如前
史生一人
右依例所請如件」

第1図 木筒訣文の表記法

1992年出土の木簡



第2図 木簡の形態分類

奈良・平城京跡

- | | |
|-----------------|---------------------------|
| 1 所在地 | 奈良市北新町 |
| 2 調査期間 | 一九九〇年(平成2年)七月～八月、二一九九一年一月 |
| 3 発掘機関 | 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部 |
| 4 調査担当者 | 代表 町田 章 |
| 5 遺跡の種類 | 都城跡 |
| 6 遺跡の年代 | 奈良時代 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |
- 一 第三〇次調査

駐車場造成に伴う発掘調査で、平城宮の南に接する左京三条一坊十・十五・十六坪にかかる地域である。四本のトレンチを設定して計約一七〇〇m²を調査した。

その結果、十五・十六坪の間には三条余間小路が存在せず、両坪が奈良時代を通じて一体の敷地として利用されたことが明らかになった。但し、両坪の間には東西中軸線上に門を開く築地塀があり、南北二つの区画に分けて利用されていたと見られる。十五坪の中心部では、三棟の大聖東西棟建物の東西に南北棟建物を配するとい、京内の宅地だけでなく、宮内でも例を見ない配置が奈良時代を通じ

て続いている。これらはいずれも当初の獨立柱建物を後に礎石建物に建て替えている。また十六坪では二間×七間の身舎の四面に庇が付く極めて格の高い建物が建てられ、京内では最大規模の井戸SE〇六が設けられている。SE〇六は一边が約一・八mの蒸籠組の井戸で、從来京内で最大であった長屋王邸の井戸SE四五八〇の一边一・三五mよりもはるかに大きい。横板は七段（一段の高さは二四・五m）と二六・〇m²が現存する。深さは約三三mである。圓形および井戸枠内埋土出土の土器の年代から、奈良時代後半に掘られ、長岡遷都以後に廃絶したものと考えられる。なお、井戸枠内埋土から奈良時代末期の軒丸瓦も出土しており、その他、木製品としては蒼串・曲物がある。

一方、十坪と十五坪の間では、東一坊坊間東小路を検出しており、十坪は十五・十六坪とは別の区画であったことが明らかになった。十坪東邊では井戸SE三六を検出している。SE三六は、一边が約六mの隅丸方形の掘形をもち、枠木は全て抜き取られ、土坑状を量する。井戸枠抜取穴からは平城宮出土土器編年Ⅱ期（七一六～七三〇年頃）の土器が出土している。

木簡は井戸SE〇六の井戸枠内から一点、井戸SE三六の抜取穴から五点が出土した。

十五・十六坪は、その建物配置だけでなく、宮内の埋積み基壇官衙と同一型式の軒瓦が全軒瓦の四分の一を占めること、埴が多數出

土していること、「内匠寮」という官司名の書かれた木筒が出土したことなど、遺物の点でも個人の邸宅とは考えにくく、宮外官衙の可能性が高い。一方、十坪については、「～宅」と書かれた木筒が出土したことから見て、個人の邸宅の可能性がある。

二 第三三四一九次調査

駐車場造成に伴う発掘調査で、 $5\text{m} \times 10\text{m}$ の東西トレンチを設定して調査を行ない、左京三条一坊十六坪東側の東一坊大路西側溝 SD三九三五、および十六坪東端の区画施設の東南落溝を検出した。

木筒は東一坊大路西側溝SD三九三五から出土した。SD三九三五は、約五m分を検出し、幅は検出面で六四、底で四四、深さ一・六mの断面連台形の溝で、西岸に四〇×五〇cmの大河原石による護岸を持つ。埋土は上から暗灰褐色砂質土・暗灰色粘質土・暗褐色粘質土・暗灰色プラス土の四層に分かれる。木筒の出土土は暗褐色粘質土層から一点、暗灰色プラス土層から七点（うち三点は削屑）の計八点である。共伴遺物としては、金製筋金具断片、和同開珎六点、神功開宝一点、蓄金具四点、海老鍔一点、鉄釘二点などがあり、また護岸石列の南端で櫛木と思われる木製品がまとまって出土している。最下層の暗灰色プラス土層からも奈良時代後半の土器が出土しており、東一坊大路西側溝は奈良時代を通じて溝としての機能を保つていたものと考えられる。

三 第三三四一〇次調査

駐車場造成に伴う発掘調査で、九〇畳を調査した。位置は左京三条一坊十坪の西南部にある。奈良時代の蛇行する流路SD〇一（幅四~六m、深さ1m）、これと重複する井戸SE〇一などを検出した。SE〇一は、井戸图形は九五cmの方形で、内側に八枚前後の薄い紙板を立てている。井戸底から須恵器横瓶・広口壺や箱状綱物などとともに木筒七点が出土した。木筒はいずれも削屑である。SE〇一は遺物から細かい年代を限定できないが、SD〇一下層堆積のある時点で造られ、その上層と同時に廃絶している。SD〇一下層からは内面に放射暗文とらせん暗文をつける土師器杯Aが出土しており、平城ⅡからⅢ期（七三〇~七五〇年頃）の早い段階まで流路として使用されたようである。上層からは土師器碗Aが出土しており、平城Ⅲ期の中段階以降のある時点で埋められたものと考えられる。

8 木筒の积文・内容

一 第三三〇次調査

井戸SE〇六

(1) 「内□寮」

(61) × 17 × 2 019*

井戸SE三六

(2) × 枝宅車二両

(赤染き)

□年六月廿一日 □□□□

(189) × 33 × 7 081*

(3) <蓮子毫斗>

(291) × 25 × 2 031 *

二 第三三四一九次調査

第一坊大路西側溝 SD三九三五

(1) 池万呂 □ □ 女



(36) × (10) × 2 031

(1)は暗褐色粘質土層から出土したもの。人名を記すが、内容は不明である。

三 第三三四一〇次調査

井戸 S801

(1) 西鶴

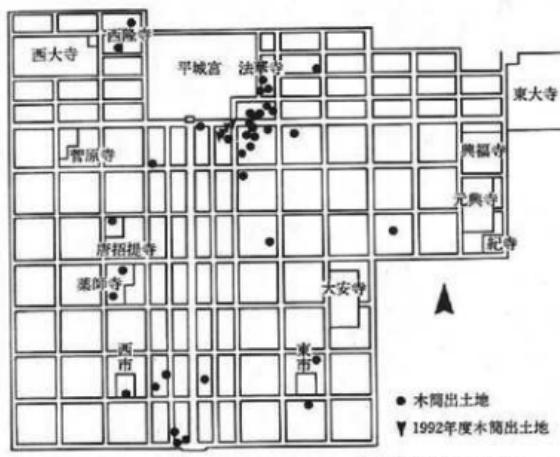
(2) 西

91

91

左京三条一坊十坪は平安京では神泉苑の位置にあたる。その位置で奈良時代の蛇行流路を検出し、池の存在を示唆する「西鶴」の木簡が出土したことは注目に値する。但し、(1)(2)のように、某宅の存在を推定させる木簡も出土しており、今後左京三条一坊十坪の性格を検討していかねばならないであろう。

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡報』二七(一)
九九三年 同『一九九一年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九九三年)
(森 公章)



平城宮木筒出土地点図



奈良・平城京左京三条三坊三坪

所在地 奈良市大宮町七丁目

調査期間 一九九二年(平成4年)四月~五月

発掘機関 奈良市教育委員会

調査担当者 松浦五輪美・原田憲一郎

遺跡の種類 都城跡・河道跡

遺跡の年代 弥生時代~桃山時代

遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査地は、平城京の条坊復原では、左京三条三坊三坪の北西の一画にある。検出した遺構には、弥生時代の溝一条、奈良時代の掘立柱建物六棟、土坑三基、井戸一基、中・近世の土堤、木杭列がある。発掘区の西半は、中・近世の南北方向の河道により、それ以前の遺構が失われていた。この旧河道は当時の佐保川の流路と思われる。

柿経を中心とする大量の

木簡は旧河道内と、その氾濫による砂層から出土した。今回の調査地の北西約一二〇mの地点でも、やはり河川の氾濫と思われる砂層から一九七四年に一万点近い柿経・符塔等が出土しておらず(奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊』一九七五年)、同じ佐保川の旧河道とみることができる。

8 木簡の現文・内容

- (1) 「親近使作是念仏道長遠久受勤苦乃可得」
 (2) 「□□人仏道慎勿懷驚懼譬如陰惡道廻絕多毒獸」
 (3) 「□□生死煩惱諸險道故以方便力為息設涅槃」
 (4) 「我今乃知實是菩薩得授阿彌多羅三藏」

35×24×0.3 061

35×24×0.3 061

35×24×0.3 061

35×24×0.3 061

35×24×0.3 061

35×24×0.3 061

35×24×0.3 061

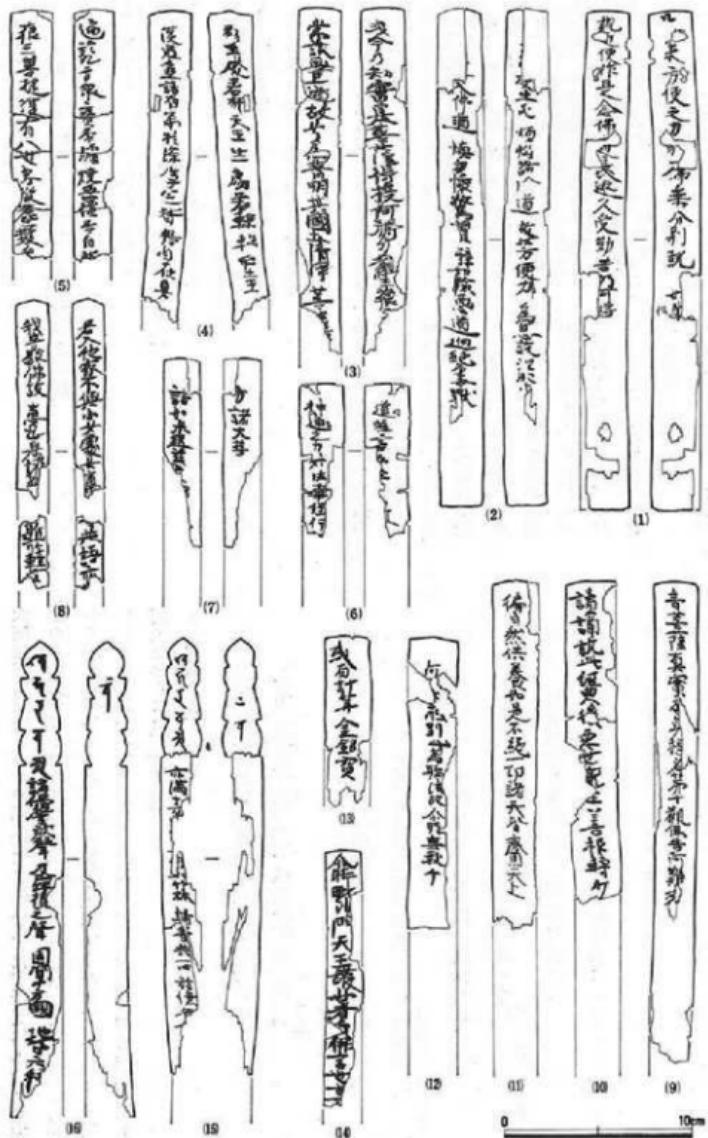
35×24×0.3 061

35×24×0.3 061

35×24×0.3 061

35×24×0.3 061

- ・「迺於九方衆宝香爐燒無價香自然× (132)×21×0.3 061



- | | |
|-------|---------------------|
| (6) | •「神通之力若法華經行□ |
| (7) | •「道經書□」 |
| (8) | •「方諸大苦□」 |
| (9) | •「我等敬仏故悉忍是諸□…斯所懸言× |
| (10) | •「若入他家不與小女處女寡…□共語亦□ |
| (11) | •「音菩薩真實□身□名第十觀仏告阿難□ |
| (12) | •「詒誦說此經典後應世□生善根軀少× |
| (13) | •「猶自然供養如是不絕一切諸天皆蒙天上 |
| (14) | •「阿□」忬到此為聽法故余時無數千 |
| (15) | •「或有計算金銀寶× |
| (16) | •「爾時毗沙門天王護世者白仏言世尊× |
| (17) | •「諸如來起慈□」 |
| (18) | •「方諸大苦□」 |
| (19) | •「諸如來起慈□」 |
| (20) | •「我等敬仏故悉忍是諸□…斯所懸言× |
| (21) | •「若入他家不與小女處女寡…□共語亦□ |
| (22) | •「音菩薩真實□身□名第十觀仏告阿難□ |
| (23) | •「詒誦說此經典後應世□生善根軀少× |
| (24) | •「猶自然供養如是不絕一切諸天皆蒙天上 |
| (25) | •「阿□」忬到此為聽法故余時無數千 |
| (26) | •「或有計算金銀寶× |
| (27) | •「爾時毗沙門天王護世者白仏言世尊× |
| (28) | •「諸如來起慈□」 |
| (29) | •「方諸大苦□」 |
| (30) | •「諸如來起慈□」 |
| (31) | •「我等敬仏故悉忍是諸□…斯所懸言× |
| (32) | •「若入他家不與小女處女寡…□共語亦□ |
| (33) | •「音菩薩真實□身□名第十觀仏告阿難□ |
| (34) | •「詒誦說此經典後應世□生善根軀少× |
| (35) | •「猶自然供養如是不絕一切諸天皆蒙天上 |
| (36) | •「阿□」忬到此為聽法故余時無數千 |
| (37) | •「或有計算金銀寶× |
| (38) | •「爾時毗沙門天王護世者白仏言世尊× |
| (39) | •「諸如來起慈□」 |
| (40) | •「方諸大苦□」 |
| (41) | •「諸如來起慈□」 |
| (42) | •「我等敬仏故悉忍是諸□…斯所懸言× |
| (43) | •「若入他家不與小女處女寡…□共語亦□ |
| (44) | •「音菩薩真實□身□名第十觀仏告阿難□ |
| (45) | •「詒誦說此經典後應世□生善根軀少× |
| (46) | •「猶自然供養如是不絕一切諸天皆蒙天上 |
| (47) | •「阿□」忬到此為聽法故余時無數千 |
| (48) | •「或有計算金銀寶× |
| (49) | •「爾時毗沙門天王護世者白仏言世尊× |
| (50) | •「諸如來起慈□」 |
| (51) | •「方諸大苦□」 |
| (52) | •「諸如來起慈□」 |
| (53) | •「我等敬仏故悉忍是諸□…斯所懸言× |
| (54) | •「若入他家不與小女處女寡…□共語亦□ |
| (55) | •「音菩薩真實□身□名第十觀仏告阿難□ |
| (56) | •「詒誦說此經典後應世□生善根軀少× |
| (57) | •「猶自然供養如是不絕一切諸天皆蒙天上 |
| (58) | •「阿□」忬到此為聽法故余時無數千 |
| (59) | •「或有計算金銀寶× |
| (60) | •「爾時毗沙門天王護世者白仏言世尊× |
| (61) | •「諸如來起慈□」 |
| (62) | •「方諸大苦□」 |
| (63) | •「諸如來起慈□」 |
| (64) | •「我等敬仏故悉忍是諸□…斯所懸言× |
| (65) | •「若入他家不與小女處女寡…□共語亦□ |
| (66) | •「音菩薩真實□身□名第十觀仏告阿難□ |
| (67) | •「詒誦說此經典後應世□生善根軀少× |
| (68) | •「猶自然供養如是不絕一切諸天皆蒙天上 |
| (69) | •「阿□」忬到此為聽法故余時無數千 |
| (70) | •「或有計算金銀寶× |
| (71) | •「爾時毗沙門天王護世者白仏言世尊× |
| (72) | •「諸如來起慈□」 |
| (73) | •「方諸大苦□」 |
| (74) | •「諸如來起慈□」 |
| (75) | •「我等敬仏故悉忍是諸□…斯所懸言× |
| (76) | •「若入他家不與小女處女寡…□共語亦□ |
| (77) | •「音菩薩真實□身□名第十觀仏告阿難□ |
| (78) | •「詒誦說此經典後應世□生善根軀少× |
| (79) | •「猶自然供養如是不絕一切諸天皆蒙天上 |
| (80) | •「阿□」忬到此為聽法故余時無數千 |
| (81) | •「或有計算金銀寶× |
| (82) | •「爾時毗沙門天王護世者白仏言世尊× |
| (83) | •「諸如來起慈□」 |
| (84) | •「方諸大苦□」 |
| (85) | •「諸如來起慈□」 |
| (86) | •「我等敬仏故悉忍是諸□…斯所懸言× |
| (87) | •「若入他家不與小女處女寡…□共語亦□ |
| (88) | •「音菩薩真實□身□名第十觀仏告阿難□ |
| (89) | •「詒誦說此經典後應世□生善根軀少× |
| (90) | •「猶自然供養如是不絕一切諸天皆蒙天上 |
| (91) | •「阿□」忬到此為聽法故余時無數千 |
| (92) | •「或有計算金銀寶× |
| (93) | •「爾時毗沙門天王護世者白仏言世尊× |
| (94) | •「諸如來起慈□」 |
| (95) | •「方諸大苦□」 |
| (96) | •「諸如來起慈□」 |
| (97) | •「我等敬仏故悉忍是諸□…斯所懸言× |
| (98) | •「若入他家不與小女處女寡…□共語亦□ |
| (99) | •「音菩薩真實□身□名第十觀仏告阿難□ |
| (100) | •「詒誦說此經典後應世□生善根軀少× |
| (101) | •「猶自然供養如是不絕一切諸天皆蒙天上 |
| (102) | •「阿□」忬到此為聽法故余時無數千 |
| (103) | •「或有計算金銀寶× |
| (104) | •「爾時毗沙門天王護世者白仏言世尊× |
| (105) | •「諸如來起慈□」 |

22. 「□□是可我眷□」淨仏國土不久得成無

「」

(250)×24×0.3 061

23. 「『』問其義趣是則為難若人說法令千万億」

「」

298×23×0.3 061

24. 「『』垢濁水莫染不受塵

「」

(257)×24×0.3 061

25. 「『』由旬汝身第一端正百千万福光明殊妙」

「」

297×23×0.3 061

26. 「『』退還導師作是念此」

「」

(257)×24×0.3 061

27. 「『』是」

「」

297×23×0.3 061

28. 「『』三廿八」

「」

298×24×0.3 061

29. 「『』是」

「」

297×23×0.3 061

30. 「『』常說天上道故号為普明其國土清淨善」

「」

298×24×0.3 061

31. 「『』汝是人以一切樂具施於四百万億阿僧祇

「」

297×23×0.3 061

32. 「『』不蒙仏所化當□□惡×

「」

298×24×0.3 061

33. 「『』持法華經■者說陀□」

「」

297×23×0.3 061

34. 「『』受持法華經如」

「」

298×24×0.3 061

35. 「『』聞大眾南西北方四維□如」

「」

297×23×0.3 061

36. 「『』得入无上道速成就仏身」

「」

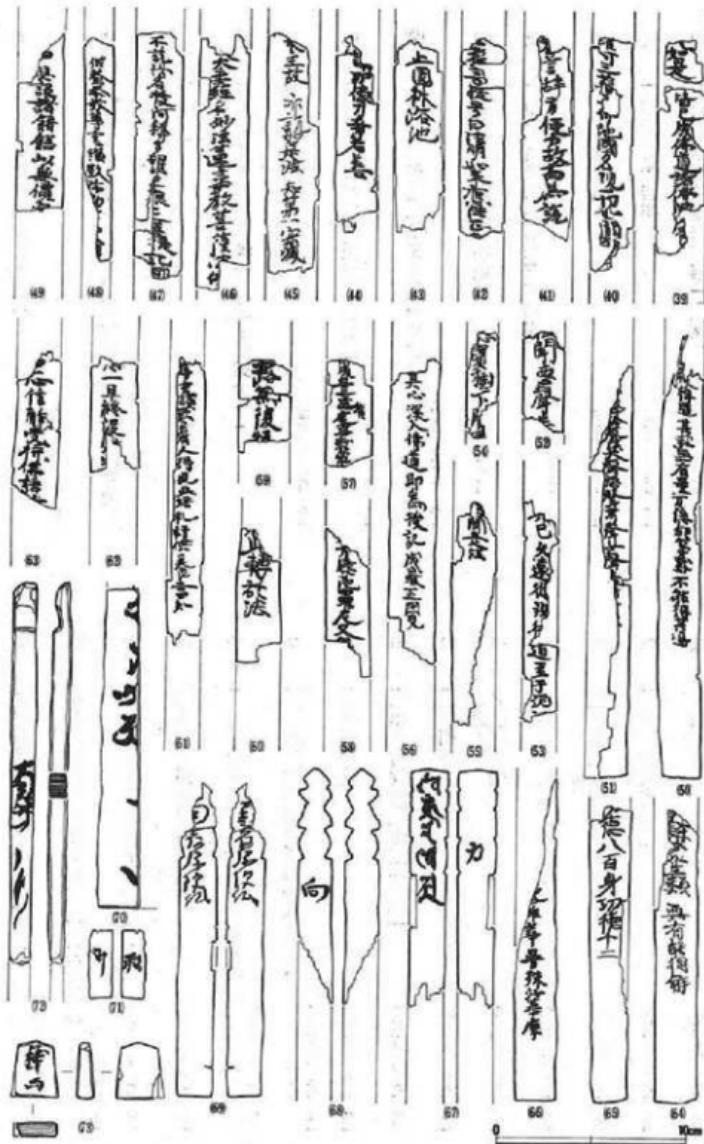
298×24×0.3 061

37. 「『』於無數劫如恒河沙生繫□」

「」

297×23×0.3 061

58	× 知無智者錯亂迷惑×	(130)×25×0.3 061	59	×大乘經名妙法蓮華教菩薩法[□]	(143)×25×0.3 061
60	「 釋迦牟尼音菩薩愍諸四衆及於天龍人非人等受 =其」		61	×不說汝名授阿耨多羅三藐三菩提記[□]	(131)×25×0.3 061
62	「□」	236×23×0.3 061	63	×供養恭敬尊重讚歎勢[□]□□□	(120)×15×0.7 061
64	· 釋迦牟尼妙法蓮華經見寶塔品第十一		65	□具設諸館舎以無惻[宝 ^文]×	(02)×25×0.3 061
66	□如是皆已成仏道諸仏[□]□	(246)×23×0.3 061	67	□得道其數無有量万億劫算數不能得其辺	(238)×21×0.3 061
68	×准阿三藏□仏陀國名現一切世間劫×	(114)×35×0.3 061	69	□鉢声笑声語声男声女声[□]	(219)×21×0.3 061
70	×言辭方便力故而為說×	(125)×23×0.3 061	71	□聞惡聲[□]	(54)×22×0.3 061
72	□薦善提号曰法明如來應供正	(102)×22×0.3 061	73	□久遠從汝□道至于泥[□]	(118)×19×0.4 061
74	×止園林浴池	(100)×24×0.3 061	75	□寶樹下[□]	(06)×22×0.3 061
76	□功德力者若善	(97)×23×0.3 061	77	× □聞是經	(182)×23×0.3 061
78	□王故亦說如是法知第一□滅×	(129)×28×0.3 061	79	×其心深入仏道即為授記成最正覺	(162)×24×0.3 061
80	×露無復□	(44)×27×0.3 061	81	□成無上道度無數衆×	(38)×25×0.3 061
82			83	□万億陀羅尼又□	(07)×23×0.3 061



60	□此転於法	(172)×23×0.3 061
61	×尊重讚歎若有人得見此塔礼拝供養當知	(154)×19×0.3 061
62	□一旦終□□	(69)×23×0.3 061
63	□心信解受持仏語□	(83)×24×0.3 061
64	□余衆生類無有能得解	(150)×22×0.3 061
65	□德八百身功德千一	(158)×21×0.3 061
66	□□華曼殊沙華摩	(170)×23×0.3 061
67	・「我表之何覺」	(127)×19×0.3 061
68	・「力	(126)×18×0.3 061
69	・「向	(126)×19×0.3 061
70	・「南無阿弥陀仏」	(156)×19×0.3 061
71	・「ウ」	(170)×23×0.3 061
72	・「取」	(170)×23×0.3 061

62 「南無阿弥陀仏」 (206)×13×10 061

63 「桂馬」 580×(25)×10 061

(1) 『綱は祐經、脚と綱は筆塔婆である。完形の祐經、筆塔婆は少なく、多くは細片であるが、約一万点が出土した。祐經は、檜や杉などの板を薄く剥いだ「こけら」あるいは「経木」と呼ばれる薄板に経文を書写したものである。今回出土した祐經は頭部形態と写経方法により、三種類に分類できる。各々の特徴を左に記す。

A-1類 頭部形態が山形で、表裏両面に経文を書写する。(1)~(8)

A-2類 頭部形態が山形で、片面のみに経文を書写する。(9)~(14)

B 類 頭部形態が五輪塔形で、地輪部を下方にのはし、五輪塔部表面に「釋迦牟尼佛」の五大種字と経文、裏面には金剛界大日如来をあらわす梵字「舍」あるいは莊嚴点つきの「ミ」を記す。(15)~(18)

書写経典の大半は法華經であるが、そのほかに無量義經、觀普賢經、般若心經、阿弥陀經を書写したものが少數出土している。法華經書写経のなかには、(3)と(4)のように、経文の同一行が書写されているものがみられることから、一束以上の祐經があつたことがわかる。断簡の所属を左に記す。

妙法蓮華經序品第一	(2)
妙法蓮華經方便品第一	(2) · (3) · (4) · (5)
妙法蓮華經譬喻品第三	(2) · (3)
妙法蓮華經信解品第四	(2) · (3)
妙法蓮華經化城喻品第五	(2) · (3) · (4)
妙法蓮華經化城喻品第七	(1) · (2) · (3) · (4)
妙法蓮華經五百弟子受記品第八	(1) · (2) · (3) · (4) · (5)
妙法蓮華經法師品第十	(3) · (4) · (5) · (6)
妙法蓮華經見塔品第十一	(2) · (3)
妙法蓮華經劫持品第十三	(8) の表 · (10) · (11)
妙法蓮華經安樂行品第十四	(7) · (8) の裏
妙法蓮華經如來壽量品第十六	(2) · (3)
妙法蓮華經分別功德品第十七	(5) · (6) · (7) · (8) · (9)
妙法蓮華經隨喜功德品第十八	(4) · (5) · (6) · (7) · (8) · (9)
妙法蓮華經法師功德品第十九	(2) · (3) · (4) · (5) · (6) · (7) · (8) · (9)
妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十	(2) · (3) · (4) · (5) · (6) · (7) · (8) · (9)
妙法蓮華經如來神力品第二十一	(2) · (3) · (4) · (5) · (6) · (7) · (8) · (9)
妙法蓮華經妙旨菩薩品第二十四	(2) · (3) · (4) · (5) · (6) · (7) · (8) · (9)
妙法蓮華經陀羅尼品第二十六	(2) · (3) · (4) · (5) · (6) · (7) · (8) · (9)
妙法蓮華經普賢菩薩勸發品第二十八	(2) · (3) · (4) · (5) · (6) · (7) · (8) · (9)

無量義經德行品第一
無量義經說法品第二
無量義經十功德品第三
仏說觀音菩薩護行法經

出典不明
(9) · (10) · (11) · (12) · (13)

祐經の書写は、限定された時間内で完了させなければならなかつたので、間違えて書写されている祐經も多い。今回出土した祐經でも、誤字(1)の裏の末字)、加字(1)の裏の「彼」、(2)の「廣」、抹消(3)が見られる。

今回出土した祐經は、両面写經のものと片面写經のものの両方があり、厚さは薄く、均一化していることなどから、祐經の年代は一五〇—一六世紀後半であろう。

祐經は、祐經と同じように、薄板に名号、題目、種字などを書写したものである。今回出土した祐經は、頭部を山形にしたものと、五輪塔形のものの二種類に分類できるが、頭部を山形にして、「南無阿彌陀仏」の名号を記したもののが大半である。

碑は墨書きである。上部と右半分を欠損している。赤外線テレビカメラによる観察では、「南無阿彌陀仏」の六字名号を、梵字で表記していることがわかる。(1)は開香札もしくは開茶札である。表面の「ウ」は「客」の略字で、裏面の「取」は人名を略したものであらう。これまでの出土資料と比較すると、その形状から開香札の可能

性が高い。④は墨書き本製品である。上部に抉りが入っており、何らかの部材を再利用していると考えられる。④は将棋の駒である。文字を彫り込んで墨を点じたものではなく、そのまま墨書きしている。裏面に文字は確認できない。

なお、祐経の经典の検索に際しては、元興寺文化財研究所の藤澤典彦氏、千手寺の木下密運氏、木簡の釈説・解釈に際しては、奈良国立文化財研究所史料調査室の方々のご教示を得た。

9 関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成四年度』(一九九三年)

松浦五輪美・原田憲二郎「祐経の考察—分類と編年について—」

(『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 一九九二』一九九三年)

(原田憲二郎)

奈良・平城京右京三条二坊三坪

・二三六一(二次調査)で出土した。

第二三六・二三六一(二次調査)は、二・三坪境の三条条間路に沿つて三〇一〇畳の発掘区を設定し行なった。この地区では古墳時代から鎌倉時代まで各時代の遺構を検出しており、うち奈良時代の遺構は、条坊関係では三条条間路の一部とその南側溝、三・六坪境小路の一部とその西側溝、三坪内では三坪北辺の築地雨落溝、坪内道路、

掘立柱建物三九棟、掘立柱塚一一条、溝六条、井戸四基、土坑六基、土葬埋納土坑一基である。調査範囲が三坪の北四分の一にとどまつたので、坪全体の様相に言及することはできないが、検出した遺構には、重複關係や出土遺物から大きくAとCの三時期の変遷があることがわかる。特にA、B期には坪の東西のほぼ中央に通路SF一〇七を設けて、坪内を東西に区隔し利用している。通路の北端、三条条間路SF一〇一との交点に門が開かないことからSF一〇七は一つの宅地内での区画通路であると考えられ、三坪が相当規模の宅地であったことが推測できる。検出した建物がいずれも比較的小規模であることと、配置に綿密な計画性が見られないことから、宅地内の主要城は発掘区外南にあり、検出した遺構は三坪内の付属的な施設であると考えられる。

木筒はA期に属する井戸SE一一から四点が出土した。SE一一は一・八×一・三mの平面扇円形揚形に内法一・〇七mの方形縦板組横棧留の井戸枠を据えたもので、検出面からの深さ二・一m



(奈良)

簡は右京三条二坊三坪の調査(奈良市教育委員会第二二三六

所在地	奈良市菅原東町、宝来町
調査期間	一九九一年(平成3)一月より一九九二年六月
発掘機関	奈良市教育委員会
調査担当者	代表 小林謙一
遺跡の種類	都城跡
遺跡の年代	奈良時代
7 遺跡及び木筒出土遺物の概要	現在の近鉄西大寺駅南の一帯、平城京右京二坊から三条二坊に相当する地域で土地区画整理事業が計画されており、この事業に開かれて一九八八年(昭和63)以来発掘調査を実施している。これまでに右京三条二坊で通算一四次、約三三〇〇畳の調査を行ない、現在は右京二条二坊で調査を続いている。今回報告の木筒はA期に属する井戸SE一一から四点が出土した。SE一一



奈良市教育委員会「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成四年度」(一九九三年)
(西崎卓哉)

151×137×3 681.
33×23×4 611.

8 木簡の訛文・内容

(1) 「御米一斗六升五合 見充殿人食米一斗四合」
= 「一斗四升九合」

(2) 「進上瓜二百丹七 □」
= 「八月十六日附鴨 □」

と墨書きされた土師器杯一点がある。木製品には壺串六点、刀形、陽物形、漆刷毛、漆筆、挽物碗があり、坪内での祭祀行為や塗工房の存在を示唆している。

(3) 「護進上」「」

・「木工」「」

(114×137×1 681.)

(1)は宅地内の米の支給に関する木簡であろう。「御米」、「殿人」の記述が、三坪の住人と家政の運営と関わって注意される。(2)(3)は進上状である。(2)は宛先、差出の記述を欠くが、鴨□なる人物に瓜を託したとの意であるなら、三坪の住人某はその記述のみで差出を察知できたことになる。(3)は宛先の記述を欠き、進上の内容も不明である。木工某が差出したものか。他の一点は墨痕はあるが記読できない。木簡の訛説にあたり奈良国立文化財研究所館野和己氏の教示を得た。

9 関係文献

奈良・丹切遺跡

たんぎり



(井)

(井門)

- 1 所在地 奈良県宇陀郡橿原町大字萩原
- 2 調査期間 一九九二年(平成4年)四月~六月
- 3 発掘機関 橿原町教育委員会
- 4 調査担当者 柳澤一宏
- 5 遺跡の種類 遺物散布地
- 6 遺跡の年代 調文時代後期~十四世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

丹切遺跡は、橿原町の市街地南側に位置し、背後(南側)には丹切古墳群が広がっている。この遺跡の周辺は宇陀地域の交通の要衝となり、谷部分では延長約二五〇m、幅約一五~三〇mの自然流路を検出し、その埋土内から弥生時代後期から中世にいたる各時期の遺物が出土した。なかでも下流部分において、その数量は多い。自然流路には護岸施設等は認められない。なお、自然流路周辺では、建物跡等の遺構は検出していない。

丹切遺跡は、宇陀川の河岸段丘とこれに接する丘陵南斜面の谷部分と丘陵部分にあり、標高約三〇八m~三五〇mで、南北約七~八〇〇m、東西約三~四〇

○mが遺跡の範囲と推定される。

遺跡の東南部において、民間業者による宅地造成工事が行なわれることとなつたため、橿原町教育委員会が一九九二年度の受託事業として発掘調査を実施したもので、調査面積は約四五〇m²である。

発掘調査は、谷部とそれに隣接する尾根上をその対象地としており、谷部分では延長約二五〇m、幅約一五~三〇mの自然流路を検出し、その埋土内から弥生時代後期から中世にいたる各時期の遺物が出土した。なかでも下流部分において、その数量は多い。自然流路には護岸施設等は認められない。なお、自然流路周辺では、建物跡等の遺構は検出していない。

自然流路内からの出土遺物が大半を占め、整理用コンテナにして約二〇箱を数える。主な出土遺物として、サヌカイト片、瑪瑙片、弥生土器(壺・甕・高杯)、須恵器(杯・壺・甕・高杯)、土師器(壺・杯・碗・甕・土釜)、黒色土器(杯・皿・壺)、墨書き土器、製塙土器、灰釉陶器(皿・壺)、瓦器(甕)、瓦、フイゴ羽口、鉄貨(和同開珎・隆平永宝・寛平大宝)、鉄釘、鉄板、木製品(木簡・下款・曲物ほか)、自然遺物(種子・馬糞)などがある。墨書き土器(黒色土器・土師器)には、「□家」、「子」、「字」、「井門」、「井」などと記されている。これらの遺物のうち、平安時代(九世紀後葉から一〇世紀中葉)のものが最も多く、木製品等はこの時期に含まれるものと考えられる。

木簡、墨書き土器、和同開珎等の出土によって調査地周辺に何らか

の公的施設の存在も予想され、瓦葺建物、鐵治工房等もあった可能性が高い。権原町萩原を中心とする地域には、「萩原莊」があり、一〇世紀中葉には東大寺尊勝院領莊園であったことが「東大寺經要錄」にみえ、丹切遺跡はこの莊園に含まれるものと考えられる。また、この遺跡は宇陀地域の交通の要衝に立地することから『日本書紀』壬申紀にある「菟田郡家」にかかる遺跡とも推定できるが、今はまだ、これを明らかにできない。今後の検討を期したい。

8 木筒の証文・内容

(1)



(49)×19×5 015

(1)は自然流路の埋土中より出土し、伴出土器から一〇世紀中葉以前に比定される。下半部分は焼失している。ほかに判読不能の短冊型木筒一点、墨書きとも習書とも考えられる曲物の底板状の断片二点も自然流路内から出土している。

9 関係文献

権原町教育委員会『権原町埋蔵文化財発掘調査概要報告書 一九九二年度』(一九九三年)

(権澤一宏)

京都・長岡京跡 (2)



(京都西南部)

- 調査によつて検出した遺構は、南北溝二条と東西小溝三条である。これららの溝のうち、五町のはば中央に位置する南北溝二条は一・六mを隔てて並行するが、時期差があると考えられる。このうち木簡が出土したのは南北溝 S.D.四一〇〇五からである。
- 溝 S.D.四一〇〇五は一〇mにわたつて調査しているが、幅一・七mで深さが〇・三～〇・五mの規模で、溝の西肩には長さ一・六m、幅一五cmの板材によつて護岸施設が設けられていた。堆積土は砂と粘質土との互層からなつており、かなりの流水がうかがえる。これらの堆積土とは別に、一部で木製品を多く含む粘質土層が溝底にかけて堆積していた。木簡を含むほとんどの木製品はこの層から出土している。木簡以外では木履、牽車、人形、箸などがある。箸のなかには木簡を加工したものもある。
- この層を押し流すように堆積している砂層からは多くの土器類が出土している。そのなかには「匁」「大」「圓」「田」「口器」などの墨書き土器が含まれている。
- 8 木簡の积文・内容
- (1) 「謹啓 申×
右米五 □ ×
条二坊五町の宅地推定地に
ある。同町内では今回が
初めての調査である。
- ・「誠石成 □ ×
(米×)

(1) 木筒
「長岡京跡右京第40次調査概要」(長岡京市教育委員会
『長岡京市文化財調査報告書』三一 一九九三年)

(小田樹 淳)

9 関係文献
小田樹 淳「長岡京跡右京第40次調査概要」(長岡京市教育委員会
『長岡京市文化財調査報告書』三一 一九九三年)



(2) 「金銀」
(30)×(30)×(45) 95.1
(1)は文書様木筒の断片で上下とも刀子によつて斜に切れ目を入れて折られ、左端は割れている。表面は刀子によつて削られて墨が部分的に薄くなっている。
内容は、表面は米を請求するものと考へられ、また裏面は検討を要するが、人名の可能性が考へられる。
(2)は左端が割れており、裏面は割り裂いたままで未調整である。右下端が切り込まれ、中央部に突出部があることから翫籠になると考えられる。

これ以外に箸状に一次加工されたもので、両者とも表裏に墨痕が認められるものが二点出土している。

以上四点が出土した木筒であるが、(2)以外は一次的に加工されたものである。(2)の内容や(1)の木筒、木履などから金銀の出納に關係する役人が当町内にいたことが窺われる。



(京都西南部)

京都・勝龍寺城跡

しょうりゅうじょう

所在地 京都府長岡京市勝竜寺

2 所在地

1 調査期間 一九八八年(昭63)五月~一九八九年(平1)三月

2 調査期間

3 発掘機関 鈴長岡京市埋蔵文化財センター

4 調査担当者 岩崎 誠・坂田孝彦

5 遺跡の種類 城郭跡

6 遺跡の年代 一二三三九年~一五八一年頃

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

勝龍寺城は、山城三大河川の木津川・宇治川・桂川の合流点の北約二・五kmにある。立地は北からのびる段丘の先端部に位置し、標高一三・五m前後を測る。

当城の始まりは、南北朝期の貞応二年(一二三三九)に細川頼春・師氏が築城したと伝えられる。また長禄元年(一四五七)以前に島山義就が乙訓郡代役所として築城したとする説もあり、初現は明確でない。応仁の乱では

も度々文献に登場し、西軍畠山義就の支配下にあった。一六世紀中ごろには三好三人衆の一人岩成主税友道の居城となっていたが、永禄三年(一五六〇)に織田信長の支配下となり細川藤孝が城主となつた。藤孝は元亀二年(一五七一)に勝龍寺城を再整備した。しかし天正九年(一五八一)に藤孝は宮津城に移り、翌年山崎の戦いで明智光秀軍の拠点として使われたが落城した。

今回の発掘調査は、勝龍寺城本丸・沼田丸の公園整備に伴い実施されたもので、細川藤孝再建時の土塁石垣や建物礎石、石組井戸、門、本丸や沼田丸を囲む堀、本丸内に築かれた廻やそれを渡るための橋脚などが検出された。出土遺物には、一六世紀後半の土器類、陶磁器、瓦、木器、漆器、金属器、墨書き土器、瓦製土管や、石垣に組み込まれた石造物類などがある。

木簡の出土した遺構は、本丸内に掘られた四基の石組井戸の一つS E〇八である。この井戸からは、曲物底板や木片、土器器皿、国産陶器なども出土している。併出した土器類から一六世紀後半の藤孝居城期に使用されていた井戸と考えられ、木簡も同時期のものと思われる。木簡は、ここに報告する一点だけであった。

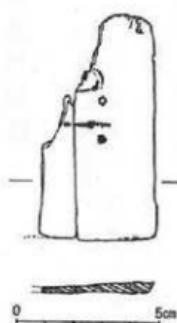
8 木簡の記文・内容

(1)

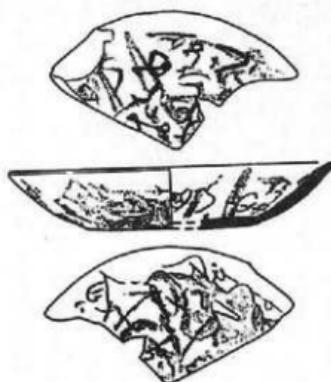


(615)×(41)×4 881

下端面と右側辺は切り抜法により整形されている。左側辺と上部



木筒実測図



墨書土器実測図

は欠損している。板材は厚さ二■から四■の板目材を用いている。その片面に、直線と円状の墨痕がみられるが、意味は不明である。本丸の一六世紀遺物包含層から出土した墨書土器にも、意味不明の記号を描いたものがある。この土器も木筒同様に、ある規則性をもつて描かれているように見受けられる。従って、落書きというよりも、呪文かそれに類する呪術・祭祀に使用した際に描かれたものではないかと思われる。

9 関係文献

鈴長岡京市埋蔵文化財センター「勝龍寺城発掘調査報告」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』六 一九九一年)

(岩崎 誠)

滋賀・鴨田遺跡



(長浜)

する。木簡は、長浜新川改修工事に伴う第四次調査において、J区の土坑状遺構から検出された。この遺構は復原径約一〇六m、深さ約二八mである。隣接地には「堂前神社旧跡」碑がある。

8 木簡の叢文・内容

(1) 「長州住
三十三所巡礼聖三人」

120×44×5 031

- 1 所在地 滋賀県長浜市大戌亥町字東堂前
2 調査期間 一九九二年(平成4年)九月~一二月
3 発掘機関 滋賀県教育委員会・財團法人滋賀県文化財保護協会
4 調査担当者 吉田秀則・北村圭弘
5 遺跡の種類 集落跡
6 遺跡の年代 一二世紀~一五世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
鴨田遺跡は姉川の形成した扇状地性沖積平野の扇端部やや外側に位置する。当地付近は延永元年(一二〇〇)立荘の青蓮院門跡領坂田新莊推定地にあたり、總持寺文書などで高野辺としてあらわれる、旧称高錆の大辰巳町の故地伝承地に近接

この木簡は西國三十三所巡礼札で、左脇に宝徳四年(一四五二)の年紀があり、現存するものとしては姫路市広峰神社の文安五年(一四四八)例について一番目に古い。また右脇には長州住(山口県)と多くの札に見られるように、巡礼者の出身地を示すが、中央の文言に達札聖と記される例はきわめて稀である。出土状況や破損状況等から、札は故意に三つに折られて破棄された可能性が高い。北西約一五kmの琵琶湖上には、三十番札所の竹生島宝嚴寺が存する。

(北村圭弘)



三重・六大B遺跡

路の建設に伴う緊急調査であり、一九八八年度は三重県教育委員会が、一九八九年度からは三重県埋蔵文化財センターが調査を実施している。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 所在地 | 三重県津市大里疋田町 |
| 2 調査期間 | 一九九二年(平4)九月~一二月 |
| 3 発掘機関 | 三重県埋蔵文化財センター |
| 4 調査担当者 | 小菅文裕・中村光司 |
| 5 遺跡の種類 | 集落跡・官衙跡か |
| 6 遺跡の年代 | 弥生時代後期以降 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |



(津西部・津東部)

六大B遺跡は、伊勢平野のほぼ中央部、津市街地から北北西へ約5kmの、志賀川支流毛無川の左岸に位置する。丘陵を挟んで南方

四畝の安濃川流域には、弥生時代の拠点的集落である
納所遺跡がある。遺跡の立地は、毛無川に向かって緩く傾斜する沖積地で、標高7m~11m前後を測り、付近一帯には水田が広がる。

六大B遺跡の調査は、国道二三号バイパス・中勢道

昨日度までの調査で、遺跡が南北300m以上の範囲に広がることと、弥生時代以降の全時代にわたる複合遺跡であることなどが確認されている。主要な遺構として奈良と平安時代にわたる獨立柱建物群があり、大型獨立柱建物を中心とする建物群の配置には計画性が窺われる。全体的に遺物の出土量は多く、遺跡の性格を示す出土遺物として、多量の縄繩陶器、円面鏡、和同開珎銀鏡、石笛などがあげられる。

今回木簡が出土した遺構は、獨立柱建物群より西側の地区で、東西方向に走る幅約2m、深さ約40cmの溝である。遺跡の中心からやや西寄りに位置すると考えられる。共伴遺物には、高台をもつ須恵器杯、暗文の認められる土器皿などがある。木簡のほか、この溝からは木製遺物の出土があったが、多くは自然木(枝)である。溝の時期は、須恵器杯から判断して八世紀後半(奈良時代末)に比定でき、木簡もこの時期のものと考えられる。

出土した木簡は一点で、他には一三世紀後半の井戸から木筒状の木製品一点(○三三型式)が出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1)

□□□□十□年十月七日□前東人

234×38×5 011

9 ■ 関係文献
三重県埋蔵文化財センター『一般国道』三号中勢道路 埋蔵文化
財発掘調査報』Ⅲ・N・V (一九九一・一九九二・一九九三年)
(中村光司)

波辺晃宏氏にご教示を得た。

形態的には、短冊型で、赤外線テレビカメラによれば、表面の上端と下端近くに墨痕が認められるが、判読不能である。全体に火を受け、炭化している。裏面は下半部が判読可能であり、年月日と人名が読みとれる。内容は判然としないが、日付の下の人名は文書木筒の差出者と判断し、これを裏面と考えた。「十」の前には年号が、「年」の前には数字が入るものと思われ、数字に関しては「四」か「一」の可能性が高い。

本遺跡の所在する窪田の地は、平城宮跡出土木簡に「伊世国奄伎郡久苦多里」とみえる(『平城宮発掘調査出土木簡概報』一二)。律令制下における地方の下級官衙の存在を思わせる建物群の構成と、多量の遺物の出土に加え、木筒の出土は、本遺跡が官衙跡である可能性をより高める資料として注目される。

なお、木筒の訳説については、奈良国立文化財研究所の寺崎保広、

十ニ吉百廿號東人

山梨・一本柳遺跡

ほんやなせ



(沢)

遺跡及び木簡出土遺構の概要
一本柳遺跡は、甲府盆地西部を流れる御動使用と瀧沢川がつくる扇状地の扇端部、標高二六〇m前後位置している。そのため遺跡周辺は古くから湧水に恵まれ、また湧水からの小河川が発達も流れ、北部は果樹園地帯、南部は水田地帯となっている。

(4) 本遺跡の調査は、甲西バス建設に伴い、一九九一年九月から山梨県埋蔵文化財センターが行なった。

- 1 所在地 山梨県中巨摩郡若草町十日市場
- 2 調査期間 一九九一年(平3)九月~一九九二年一二月
- 3 発掘機関 山梨県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 中山誠二・丸山哲也・小林健二
- 5 遺跡の種類 水田跡・寺院跡
- 6 遺跡の年代 一二世紀~一八世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

河川の氾濫による砂礫層・シルト層・粘土層が堆積しており、この間に二層から三層の文化層が形成されている。
調査の結果、古代末から近世にかけての水田跡、戦国時代の溝、井戸、木棺二基が発見された。溝、井戸は、戦国時代の水田が氾濫により埋没した後、堆積した砂礫層の上から掘込まれており、漆碗、常滑焼の甕、かわらけなどが出土した。

8 木簡の积文・内容

(1) (八葉)
白蓮一肘間 (A面)

<input type="checkbox"/>	炳現肉
<input type="checkbox"/>	字榮光色
<input type="checkbox"/>	碑智俱入金光明縛
<input type="checkbox"/>	召入如來寂靜
<input type="checkbox"/>	智

(迷)

<input type="checkbox"/>	故三界城
<input type="checkbox"/>	信
<input type="checkbox"/>	故十方空

<input type="checkbox"/>	本末
<input type="checkbox"/>	無東西
<input type="checkbox"/>	阿
<input type="checkbox"/>	處有南北

(B面)

「梵字」

「梵字」

「梵字」悟故十方空

〔梵字〕

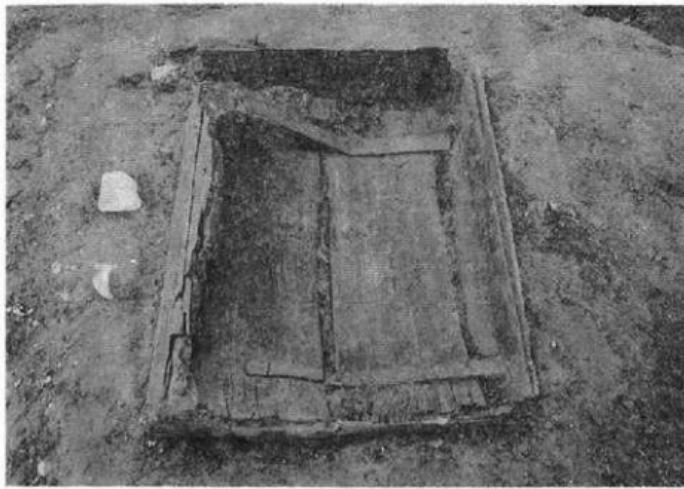
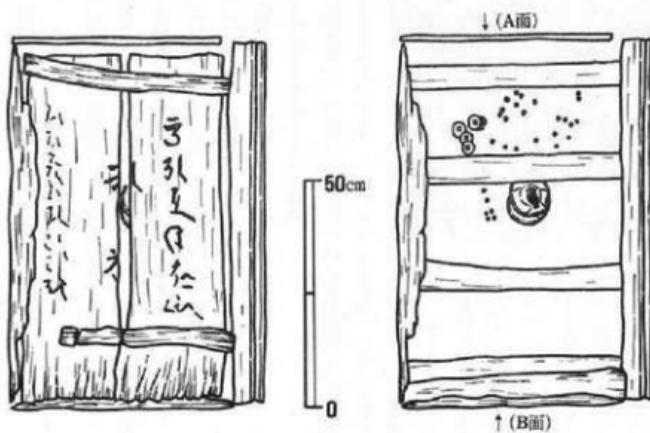
本来無東西

380×34×2 051

328×33×2 051

051

(380)×(34)×2 050



1号木棺出土状况

(5) 「梵字」何處有南北 □

384×38×2 81

(1)は二号木棺で、縦八〇cm、横五五cm、高さ一〇〇cmで、底に板を四枚敷いた後、側板をはめ込んだ構造になつており、砂礫層の土庄で蓋板が崩れ落ちていた。蓋板には梵字が、側板にも梵字・偏文が書かれ、種穂をのせたかわらけ、古錢六枚、数珠が調査されていた。

また、二号木棺にも梵字・偏文が書かれていると思われるが、判読是不可能である。これら梵字・偏文は真言密教で用いられ、元興寺所蔵の『入棺作法』にも記されている。本遺跡の東側では、近在する法華寺の子院で、武田信玄の祈願寺であった福寿院の一部が調査されており、これらの寺院との関係が注目される。また溝は福寿院の寺域境を示すものである可能性が極めて大きく、信玄の影響のもとに、子院の中でも広大な寺域を誇っていたことが窺える。

二号木棺からは(2)～(5)の四点の呪符木簡が出土している。(3)(4)(5)には一号木棺の側板に書かれていたものと同じ偏文が書かれているのが読み取れる。したがって(2)には「遂故三界城」が書かれていたものと思われる。

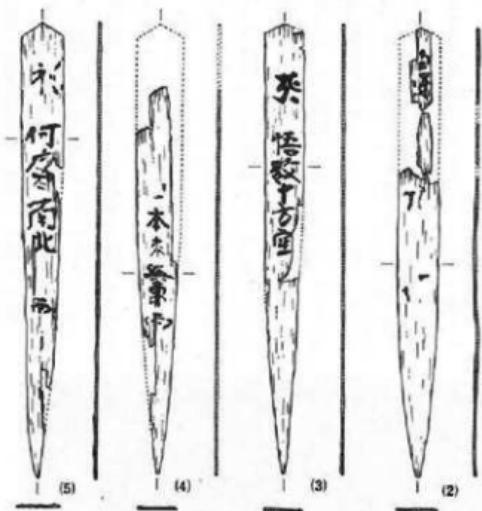
今回出土した資料は現在分析の途中であり、判読不可能な文字や解明されていない部分が多い。しかし今回のように中世の木棺がほぼ完全な状態で発見された例は全国的にも珍しく、中世の葬送儀礼の一端を垣間見ることができる貴重な資料である。

9 関係文献

藤澤典彦「元興寺所蔵葬送関係次第『入棺作法』」(『元興寺文化財研究』鈴元興寺文化財研究会編著一九九二年)

五味信吾「福寿院について」(山梨県教育委員会『二本松遺跡』一九九二年)

(小林謙二)





(谷) 谷

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
安養寺森西遺跡は東武伊勢崎線太田駅の南西約八km、東流する利根川左岸の畑作地帯に位置している。遺跡付近の地質および地形は、

台地形成層の上に利根川の氾濫堆積物が厚く覆い、自然堤防に似た低台地となっている。付近の標高は三三三m前後である。

m前後である。
8 遺跡の調査は上武道路（国道一七号線ハイバス）建設に伴うものであり、尾島町内では一九八五年から一九

群馬・安養寺森西遺跡

あんようじ もりに

1 所在地 群馬県尾島町安養寺
2 調査期間 一九八八年(昭63)四月~一〇月
3 発掘機関 勝利群馬県埋蔵文化財調査事業団
4 調査担当者 飯田陽一・関根慎一・樋口伸男
5 遺跡の種類 集落跡・烟跡ほか
6 遺跡の年代 六世紀~九世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
安養寺森西遺跡は東武伊勢崎線太田駅の南西約八km、東流する利

根川左岸の畑作地帯に位置している。遺跡付近の地質および地形は、古墳時代の烟、奈良・平安時代の集落、中世跡跡および中近世の井戸群などである。

井戸は总数二三基で、このうち木製品が出土したのは一九世紀前半の井戸である。「蘇民将来」の護符のほか、櫛、漆鏡鏡、曲物、井桁、果核などが出土している。肥前系磁器が多量に共伴しており、これを年代推定の根据とした。

一九九三年度の後半より整理作業に着手し、翌年度に報告書刊行の予定である。

8 木簡の积文・内容

(1)

- 「□民」

- 「□來」

- 「将来」

- 「之子」

- 「孫也」

(2)

- 「蘇民」

- 「将来」

- 「之子」

- 「孫也」

30×8×10 061

39×14×13 051

(3) 「ソ」
「みん」

「志やう」
「らい」

「し」
「そん」

「口」
「□」

29×21×29
061

(4) 「ソ」
「□」

「ミン」
「ライ」

「シャウ」
「ノ」

「子」
「ソン」

「ナリ」
「ナリ」

29×19×16
061

(5) 「口」
「乃」

「来」
「子」

「子」
「口」

31×24×24
061

(6) 「口」
「ノ」

「将」
「口」

「之」
「来」

「子」
「ソ□」

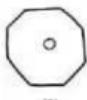
29×17×16
061

六点の護符が同一の井戸の下層から一括出土した。すべて材の中心を使用している。(1)～(2)は四角柱、(3)～(6)は八角柱でいずれも上辺を尖らせており、(1)～(5)は中央に貫通した孔があり、棒状具を装着した痕跡が認められる。上下両面を除き周囲の全ての面に墨書きがある。墨書きは比較的鮮明であったが、出土後の退色もあり羽模は赤外線写真によるところが大きい。

9 関係文献

静岡県埋蔵文化財調査事業団『年報八』(一九八九年)

(飯田陽一)



(3)



(2)

群馬・世良田諏訪下遺跡
 せらだなわした

1 所在地	群馬県新田郡尾島町世良田
2 調査期間	一九九一年(平3)一〇月～一九九三年六月
3 発掘機関	尾島第二工業団地埋蔵文化財発掘調査団
4 調査担当者	三浦京子
5 遺跡の種類	集落・墓・生產跡
6 遺跡の年代	五世紀～九世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	世良田諏訪下遺跡は大間々原状地末端の低台地上に位置し、北側に石田川が東南流する。現状は起伏のない平坦な地形であり、水田や牛蒡などの畑作が行なわれている。調査は第二工業団地造成に伴う発掘調査で、調査面積は用地面積二五五m ² の内、緑地化される六七〇〇m ² を除いた面積である。

(深一六八) この地域は仁安三年(一九九二)に新田義重より義季に譲られた新田庄の郷の



一部と想定され、周辺には中世新田氏一族関係、近世徳川氏関連の遺跡が多い。西方一・五kmに龍持寺、西南方一kmに長榮寺や世良田東照宮、〇・五kmには船田館跡・今井城跡などが存在する。また、西方には歌舞伎遺跡・三ツ木遺跡などの古墳時代から平安時代の集落跡や小角田古墳群などが存在する。当遺跡も世良田四十八塚として知られ、明治・大正時代にはまだ墳丘を残すものが多くあったといふが、その後の開発による削平のため、調査に入った時点では、地域内に墳丘を残すものは一基のみであった。発掘調査の結果は、帆立貝式古墳四基、円墳六七基と、予想以上の古墳群が検出され、円筒・形象埴輪など多くの貴重な資料が得られた。この他、古墳時代後期の堅穴住居五棟、平安時代の鰐跡及び堅穴住居一四棟、平安時代初期の洪土により埋没した水田跡・烟・用水堀などを検出している。中世以降では溝と土坑が多く、大半の溝が浅く直交するもので烟や水田などの地境と思われる。

木簡を出土した溝は、調査地域の南寄りに位置し、南西から北東方向へ一八六m流れ、途中で北に大きく屈曲し石田川へと向かうが、末端は氾濫原の中に消え不明瞭となる。南西側は調査区域外へ抜け、方向としては世良田の中心地へ向かっている。溝幅は四七m、深さ一・六～一・二mを測り、全長二五三mを調査した。木簡は緩かな流水により流されたような状態で、ほぼ底面から五〇cm以内の堆積土中から検出されている。总数四九点で、形態は大半が上端部

を主頭状にし、左右両側に切り込みを一段から三段入れるものもあり、下端部は削り尖らせてある。他に木皿二点、板車瓦七点、曲物の底板や折敷等の破片も出土している。しかし、土器・陶器類等の出土は少なく、常滑三筋壺・大甕・鉢，在地産と思われる鉢など僅かな破片が出土しているのみである。溝の年代を推定すると常滑三筋壺の口縁部形態、甕では口縁部の縁唇が幅広く「丁」形状を呈していることや鉢の形態などから、常滑編年Ⅲ期後半と考えられる。

明らかに他の時期と考えられるものは埴輪以外には無いため、この溝はほぼ一四世紀前半の所産として大過ないであろう。

8 木簡の积文・内容

(1) 「南无大日如来」

(245)×33×3 051

(2) 「南無大日如来」

22×13×2 053

(3) 「南無阿弥陀」

(253)×33×4 050

(4) 「南無阿弥陀」

22×33×3 050

・「南無阿弥陀」

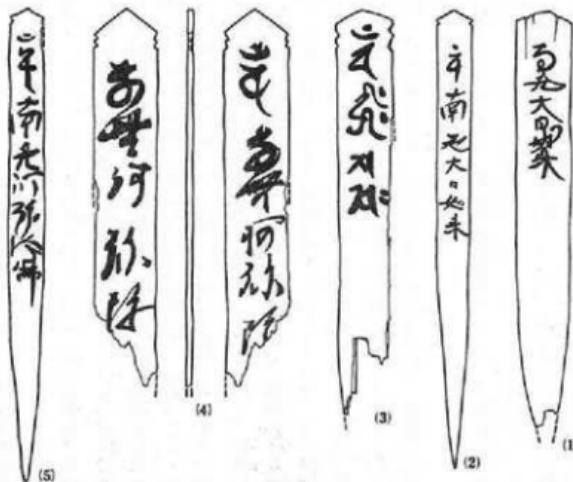
22×33×3 050

(5) 「南無阿弥陀」

22×33×3 050

「南無大日如来」が最も多く、明瞭なものだけで五四点、部分的に判読できるものを入れれば大半がこれに属する。この内最初に梵

字「大日如来」の種子を付けるものが三・二点見られる。他に「南無阿弥陀」が四点、梵字のみが書いてあるもの一二点である。
(三浦清子)



福島・小茶円遺跡

二〇九



- | | | |
|---|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 所在地 | 福島県いわき市平山崎字小茶円・馬場 |
| 2 | 調査期間 | 一九九〇年(平2)一月(総統中) |
| 3 | 発掘機関 | いわき市教育文化事業団 |
| 4 | 調査担当者 | 吉田生哉・猪狩みち子・佐藤勝比古 |
| 5 | 遺跡の種類 | 集落跡・水田跡 |
| 6 | 遺跡の年代 | 九世紀～一八世紀 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 小茶円遺跡は、平市の市街地東方約四km、夏井川下流右岸に位置する。太平洋の海岸より西へ約三kmのところにあり、陸奥国磐城郡磐城町に属する。太田目遺跡は、小茶円遺跡の南東側に位置し、磐城郡に属する地域である。 |

ている【木曾研究】(三)。この地域には、海進過程に形成された浜堤が數列確認されており、現在の海岸線が形成されたのは、今から約一八〇〇年前とされている。遺跡は浜堤間に立地し、太平洋に向かって東に伸びる海岸段丘の開口部にある。現況は、夏井川に北面する田園地帯で、標高は三~四前後を測る。

小茶円遺跡の調査は、常磐ハイバス道路工事に伴う発掘調査である。調査面積は、ほぼ南北に走る道路幅六〇m、長さ四五〇mにわたる路線内の約二万一九七二畝である。

調査の結果、調査範囲の南側区域より古代から近世にかけての水田跡が數面確認された。遺跡の主要な部分は北側区域で、とくに西側寄りに建物跡が多數確認されている。現在のところ獨立建物一四棟、竪穴住居五二棟、井戸を含む土坑一八三基、溝三〇〇条などが検出されている。遺構の大半は、おおよそ九世紀から一〇世紀代に入るものと考えられる。

遺物の出土量は、整理用コントナ約一六〇箱である。内訳は、土師器・須恵器が大半を占め、このほか、弥生土器、灰陶陶器・綠釉陶器・陶器をふくむ陶磁器、手捏ね土器・土煙・カラカマド、曲物・椀・桶などの木製品、鉄滓・刀子などの金属製品もある。

このうち、浦賀の性格を示す遺物は、木簡のほかに舞鶴陶器五点、灰釉陶器九点、カラカマド二個体、風字鏡一点である。墨書き器は、一六点出土しており、判読できるものに「十一」

「十二」「十三」「石木太」「署」がある。

木筒は六点あり、いずれも井戸内からの出土である。うち五点は一三世紀後半～四世紀（木筒研究）一四のもので、今回報告する一点は、「大同元年」（八〇六）と墨書きされた木筒である。

8 木筒の祝文・内容

(1) 判□郷戸主生部子維正税

」

（前項）

「大同元年九月□□日『大同元十月三日』
27×36×2.8cm

方形で隅柱をもち、長方形の割板を横位に重ねて側板とする井戸

柱内より出土した木筒である。遺存状況がきわめて良好な完形品で、

上端部が方頭状を呈し下端部を鋭く尖らせたものである。文字は表

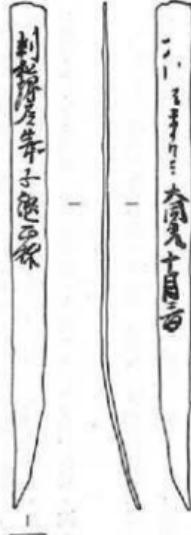
裏に記載され、墨痕は比較的鮮かである。表面には署名『和名類聚

抄』に該当無なし + 人名 + 「正税」と記され、裏面には年月日が記

されている貢進物付札。裏面は一旦書いた年月日を削消し、改めて

記載している。九世紀前半の正税に関するきわめて貴重な史料となる。

本遺跡の隆盛期は、九世紀から一〇世紀であり、縦軸陶器や灰釉陶器・カラカマドの出土など、いわき市内においても特異な遺物群である。遺跡の性格は、磐城郡衙に比定される根岸遺跡など、周辺に所在する遺跡のあり方などを考慮に入れ、今後の調査成果をふま



えながら検討していくなければならない課題である。

なお、祝文にあたり、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

9 関係文献

鈴木・いわき市教育文化事業団「いわき市内発見の木筒」(発掘二二
一八)三八 一九九三年)

(吉田生哉)

所在地	福島県いわき市内郷御庭町番匠地
調査期間	一九九一年(平3)と一九九二年
発掘機関	いわき市教育文化事業団
調査担当者	和深俊夫・矢島敬之・末永成清
遺跡の種類	水田跡・河川
遺跡の年代	縄文時代～中世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	番匠地遺跡は、いわき市街の南西約二・五km、阿武隈山系から太平洋に向かって延びる支丘陵(中世城館の久世原館が占地)と、清水遺跡が立地する丘陵間に形成された。谷底平野に位置する。
(平)	8 木簡の状況
環境が明らかになりつつある地域である。これまでの	木簡が出土した第一号溝は、これら上・下水田遺構の中間層(標高一四・五m)で検出された。長さ約七〇m、幅約三m、深さ約〇・五mを測り、調査区の中央を南西から北東方向へ走る。溝に伴う水田遺構は検出されなかつたが、化学分析結果よりその存在は確実であり、溝は水田の用・排水施設と考えられる。溝内からの遺物の出土量は少なく、整理用コンテナ一箱ほどの土器片、十数点の手捏ね土器、三点の土馬、壺状土製品、畜串、刀状・天秤棒状の木製品、建築部材等が出土したにすぎない。文字資料は木簡二点のみである。

- (1) 「水加羽
8 木簡の状況・内容

(35) × 14 × 6 019

調査の成果として、久世原館丘陵からは古墳時代後期から平安時代にかけての多數の堅穴住居跡の検出と「磐〔郡〕」や「常」の印章銅型の出土、清水遺跡からは平安時代を主体とする堅穴住居跡や獨立柱建物群、精錬炉・鍛冶炉・木炭窯が検出され、これら製鉄関連遺構と營城部衛との関連性が注目されている。

番匠地遺跡では調査の結果、一枚の水田跡と縄文時代の自然河川が二条検出された。下層水田跡は弥生時代中期のもので、一九八七年に検出された水田遺構の大畦畔を一部補完する関係にある。上層水田跡は中世以降の所産であり、畦畔・溝・杭列等の施設が検出さ

れた。今回、木簡が出土した第二号溝は、これら上・下水田遺構の中間層(標高一四・五m)で検出された。長さ約七〇m、幅約三m、深さ約〇・五mを測り、調査区の中央を南西から北東方向へ走る。溝に伴う水田遺構は検出されなかつたが、化学分析結果よりその存在は確実であり、溝は水田の用・排水施設と考えられる。溝内からの遺物の出土量は少なく、整理用コンテナ一箱ほどの土器片、十数点の手捏ね土器、三点の土馬、壺状土製品、畜串、刀状・天秤棒状の木製品、建築部材等が出土したにすぎない。文字資料は木簡二点のみである。

現状は下部が欠損しているが、かなりの長さを有した木筒と思われ、その上端部のみに物品名を記載した付札木筒と考えられる。類例として、金沢市西念・南新保遺跡出土木筒「須留女×」(二八三)×二三×七)があげられる(金沢市教育委員会「金沢市西念・南新保遺跡」一九八九年)。内容については、物品が何を意味するのかは今のところ判然としない。時期もまた、第一二号溝内の出土遺物が古墳時代後期から平安時代の土器(主体は七世纪後半～八世纪前半)を混在しているため特定することは困難である。木筒の内容とともに今後の検討課題としたい。

本遺跡は、縄文時代において自然河川が存在したのち、弥生時代中期には水田開発が行なわれ、以後ほぼ間断なく水田耕作域となっていたものと考えられる。前述のとおり、周辺丘陵には磐城郡衙との関連が注目される製鉄遺構・遺物が検出されており、今回の木筒出土の意義もこれら遺跡のもつ総合的な性格の中で検討していくなければならないと考える。

軽説にあたり、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

9 関係文献

- 勢いわき市教育文化事業団「いわき市内発見の木筒」(『発掘二二一』三八 一九九三年)

(矢島敬之)

秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所編

『秋田城出土文字資料集Ⅱ』

秋田城跡調査事務所は一九八四年に『秋田城出土文字資料集Ⅰ』として、それまでに出土した漆紙文書と墨書き土器の集成を刊行したが、今回それに続き、秋田城跡出土木簡と『Ⅰ』以後の漆紙文書をまとめた報告書を刊行した。

木簡は、一九八九・九〇年に行なわれた外郭東門付近の第五四次調査を中心にして三二一点が掲載され、漆紙文書とともに全点に写真と解説を付す。

『木簡研究』一・八・一二にも報告が掲載されたが、今回その全貌が明らかになった。

A4版 191頁、一九九二年三月刊
価格 3000円、送料四五〇円

販売先 ○一
秋田市寺内字大畑二一

秋田城跡調査事務所
TEL〇一八八一四五一八三七

川崎市市民ミニアジアム編

『古代東国と木簡』の刊行

一九九〇年一〇月一〇日、川崎市市民ミニアジアムで開催された木簡学会の公開研究会「フォーラム古代東国と木簡」の記録である。当日の基調報告と討論が活字化され、それに展示図録「木簡—古代からのメッセージ」掲載の四編の論考も転載されている。

A4版 二四〇頁 三五〇〇円
一九九三年四月 雄山閣出版刊

木簡研究 第二号

卷頭言 田中 琢

一九八九年出土の木簡

概要 平城京跡 平城京左京二条四坊十一坪 菊簡寺 西大寺 藤原宮跡 藤原京跡 山田寺跡 上之宮遺跡 飛鳥京跡 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 平安京左京三条三坊十六町 平安京西市外町 平安京右京六条一坊十三町 平安京右京七条二坊十四町 久田美遺跡 大坂城跡(1) 大坂城跡(2) 大坂城跡(3) 上清瀬遺跡 日置莊遺跡 上町遺跡 小曾根遺跡 森北町遺跡 但馬國分寺跡 研入遺跡 鳥遺跡 山國・源ヶ坂遺跡 上流野・宮ノ前遺跡 清洲城下町遺跡 川合遺跡八反田地区 多摩ニユータウン遺跡群(1~107遺跡) 西河原森ノ内遺跡 木部遺跡 虫生遺跡 筑摩佃遺跡 国分境遺跡 門田余里制跡 黒沢城跡 秋田城跡 辻遺跡 寺前遺跡 天神山遺跡 百間川原尾島遺跡 草戸千軒町遺跡 周防國府跡

一九七七年以前出土の木簡 (一一)

平城宮跡 (第三五次)
森ノ内遺跡出土の木簡をめぐって

木簡類による和名抄地名の考察
—日本語学のたちばから—

内質人考

木簡類による和名抄地名の考察
—日本語学のたちばから—

山尾 幸久

工藤 力男

春名 宏昭

価値 三八〇〇円 五〇〇円

木簡研究 第三号

卷頭言

著者
菅山 善生

一九九〇年出土の木簡

概要 平城京跡左京三条三坊十二坪 東大寺旧境内（三社池） 藤原宮跡 藤原京跡右京七条二坊 山田道跡 山田寺跡 長岡京跡

今里城跡 烏羽華宮跡 王生寺境内遺跡 里遺跡 大坂城跡 住友

銅吹所跡 山之内遺跡 肝山遺跡 新金岡更地遺跡 龍陽郡条里遺

跡 五反島遺跡 上小名田遺跡 吉田南遺跡 明石城武家屋敷跡

今宿丁田遺跡 桃安遺跡 伊賀國府推定地 源名遺跡 忍城跡 市

原条里遺跡 鈴形地区条里遺跡 石田三宅遺跡 斗西遺跡 一葉

谷朝倉氏遺跡 淀本寺跡 上荒屋遺跡 田中遺跡 八幡林遺跡 稲

立山遺跡 的場遺跡 鶯田日条里制遺跡 柳之御所跡 矢野遺跡

岡山城二之丸跡 草戸千軒町遺跡 長登御山跡 東山跡 水田遺跡

鴻臚館跡 大宰府跡 観世音寺跡 多田遺跡 上高橋高田遺跡

一九七七年以前出土の木簡（三）

飛鳥京跡 県立明日香美術学校遺跡 大坂城跡

下曾遺跡と出土木簡

香川県長瀬寺出土の木簡

「二条大路木簡」と古代の食料品貢進制度

中國簡牍学国際学術研討会参加記

備考

鈴木 善民
館野 和己
樋口 知志
佐藤 信

価格 四三〇〇円 1500円

漢簡研究国際シンポジウム 開催される

去る一九九二年一二月一二・一三の両日、関西大学において同大学東西学術研究所主催の「漢簡研究国際シンポジウム九二」が開催された。中国・台湾で漢簡研究に携わる九名の報告をもとにして、東洋史・日本史・書道史等の分野の研究者による活発な討論が展開された。

報告は以下のとおり。

徐莘芳「中國における漢簡発掘の現状」、初世賀「居延新簡の歴史研究に対する貢献」、岳邦湖「ニチナ川流域漢代遺跡の現状」、邢義田「中央研究院歴史語言研究所所蔵居延漢簡整理工作簡報」、張羽寧「敦煌馬圈湾出土漢簡の特色」、何双全「漢簡中の符伝と過所」、李永良「敦煌漢簡中の西域史料の問題について」、彭浩「湖北省江陵出土漢簡概説」、李學勤「湖北省江陵張家山出土漢律竹簡」

木簡研究第一四号

卷頭言

八木充

一九九一年出土の木簡

板栗 平城宮跡 平城京左京二条二坊坊間路西側跡 平城京東市跡
推定地 唐招提寺 鹿原京跡 飛鳥池跡 四条遺跡 長岡京跡 1
長岡京跡 2 長岡京跡 3 逸所遺跡 木津川河床遺跡 大坂城跡
住友銅吹所跡 桑津遺跡 電車寺跡 高櫻城跡 丹波瀬郡都市遺跡
屏風遺跡 長田神社境内遺跡 宅原遺跡 沼掛遺跡 1 沼掛遺跡 2
(日坪井遺跡) 光明寺遺跡 西河原森ノ内遺跡 西河原遺跡 湯ノ
部遺跡 石川条里遺跡 内近日向周地遺跡 小茶内遺跡 富沢遺跡
多賀城跡 円福寺遺跡 田道町遺跡 C地点 上荒屋遺跡 山田郡内
遺跡 稲城遺跡 吉野口(墨山小)遺跡 三日市遺跡 長登御山跡
空港跡地遺跡(第3工区) 雀居遺跡 典善町遺跡

一九七七年以前出土の木簡(一四)

平城宮跡(第五〇・五一・五二・六三次) 上田部遺跡

瑟家今城遺跡 瑟家川西遺跡 じょうべのま遺跡 高瀬遺跡

考古資料としての古代木簡

八幡林遺跡等新潟県出土の木簡

木上と片岡

下総国司の任用と交通——二条大路木簡を手がかりに——

「教畠漢簡」研究の現状と課題

案報

編集 四五〇〇円 ■ 五〇〇円

山中 章
小林 昌二
岩本 次郎
鈴木 景二
吉村 昌之

木簡研究 第4号

1982年11月刊 領価 3500円

卷頭言 一本箆保存法の思い出ー

坪井清足

1981年出土の木簡

1977年以前出土の木簡(4)

呪符木簡の系譜

木簡と上代文学 一木簡物札をめぐってー

「漆紙文書」出土概要

和田萃

小谷博泰

佐藤宗諱

木簡研究 第5号

1983年11月刊 領価 3500円

卷頭言 一本箆史の研究についてー

関晃

1982年出土の木簡

1977年以前出土の木簡(5)

字訓史資料としての平城宮木簡

—古事記の用字法との比較を方法としてー

平城宮出土の衛士関係木簡について

小林芳規

兎頭清明

木簡とコンピュータ

田中砾

書評『草戸千軒一本箆1-』

水藤真

木簡研究 第6号

1984年11月刊 領価 3500円

卷頭言 一記紀批判と木簡ー

直木孝次郎

1983年出土の木簡

1977年以前出土の木簡(6)

山田英雄

平安時代の日記にみえる木簡

鎌田元一

日本古代の人口

『木簡研究』1~5号総目次

木簡研究 第7号

1985年11月刊 領価 3800円

卷頭言 一刀筆の変ー

土田直鎮

1984年出土の木簡

1977年以前出土の木簡(7)

早川庄八

公式様文書と文書木簡

大庭脩

中国における最近の漢簡研究

田中琢

英國出土のローマ木簡

石上英一

木簡史料紹介ー牛札ー

木簡研究 第8号

1986年11月刊 領価 3800円

卷頭言 ー最後まで残る仕事ー

青木和夫

1985年出土の木簡

1977年以前出土の木簡(8)

李學勤

中國簡牘研究的新動向

訳菅谷文則

中国簡牘研究の新しい動向

原秀三郎

倉札・札考

榮原永遠男

袖井遺跡出土木簡の再検討

出土の文字資料からみた中世民衆生活の一面

志田原重人

ー草戸千軒町遺跡を中心にー

創刊号～3号 品切れ

送料 1冊500円、2冊600円、3冊700円、4冊800円、5～10冊1500円

集 報

第一回総会および研究集会

会員新入会はこの一年ストップしたが、逝去一名、退会二名で現在二十九名であること、会員問題を中心とし、今後の会のあり方を検討する小委員会を設けたこと（委員長佐藤宗謙、委員兎頭清美、和田翠、清水みき、鶴野和己、寺崎保広）、『木簡研究』の定期講読料支払いを銀行振込に一本化したこと、等の報告があった。

編集報告（和田翠委員）

木簡学会第一回総会と研究集会は、一九九二年一二月五、六日の両日、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、会員約一七〇名が参加して開催された。会場には、平城宮第二三三、二三〇次、平城京左京三条三坊三坪、同右京三条三坊三坪、藤原宮六九一四次・七〇次、藤原京右京五条四坊、遠所遺跡の木簡のほか、研究集会の加藤報告に関連して、下野国府跡、但馬国府推定地出土の木簡が展示された。

◇一二月五日（土）（午後一時～五時）

第一回総会（議長 水野柳太郎氏）

開会の挨拶で狩野久長会長から、会員問題のための検討小委員会を設けて佐藤宗謙氏に委員長を依頼したが、会員各位も委員に意見を寄せられたい旨が述べられた。また、逝去された鈴木一男氏への哀悼の意が表せられた。統いて、議長に水野柳太郎氏を選出して議事に入った。

会務報告（第野和己委員）

会計担当の綾村委員の海外出張により、館野委員から一九九一年度の会計報告が行なわれた。引き続き八木監事から、会計が適正に行なわれている旨報告があった。その後、館野委員から一九九三年度の予算案について説明がなされた。

以上の案件について、異議なく了承された。

役員改選について

次期（一九九三・一九四年度）委員及び監事について、石上英一氏より推挙があり、拍手により承認された（一九八頁参照）。

研究集会（司会 平川南氏）

国・都の行政と木簡―「國府跡」出土木簡の検討を中心として―

加藤友康氏

加藤氏の報告は、下野國府跡出土木簡を中心として、国衙（都衙）の機構や政務・財政・儀礼体系を復原するものであり、下野國府跡の調査にあたった田熊清彦氏から遺構についての補足報告があった。加藤氏の報告内容は本号に掲載できた。

研究集会の終了後、同会場で懇親会が行われた。

◇一二月六日（日）（午前九時～午後三時）

研究集会（司会　篠山晴生氏・柴原永遠男氏）

一九九二年全国出土の木簡

平城宮跡第二二二次出土木簡

藤原京右京五条四坊出土木簡

森　公章氏

鶴野和己氏

竹田政敬氏・和田　翠氏

森氏の報告は、一九九二年に全国で出土した五一の遺跡の概要と

木簡の内容を説明したものであるが、その多くは本号に掲載できた。館野氏の報告は、木簡の内容などから遺構の性格として式部省・神祇官との関係が論じられた。竹田・和田氏の報告は、下ノ道東側溝を中心とする遺構とそこから出土した木簡について、特に祭祀との関係に注目して説明された。

午後の討論では、一日間の報告に関して活発な質疑応答がなされた。最後に鬼頭清明委員から閉会の挨拶があった。

委員会報告

◇一九九二年一二月五日（土）　於奈良国立文化財研究所

総会に先だって、会務報告、『木簡研究』第一四号の編集報告と類似、一九九三年度予算案、総会・研究集会の運営について検討が行なわれた。また編集・事務体制の整備について意見がかわされた。

◇一九九三年六月一日（水）　於奈良国立文化財研究所

会務に関する幹事の補充（今津勝紀氏）、会計については「一九九二年度決算報告及び監査報告、編集については『木簡研究』第一五号の編集計画について報告がなされ、それぞれ承認された。次に第一回総会・研究集会の日程・報告内容について検討を行なった。また、会員問題等に関する検討小委員会での議論の経過について報告があり、それをめぐって種々意見の交換がなされた。

◇一〇月二八日（木）　於奈良国立文化財研究所

会務報告・会計中間報告・『木簡研究』一五号の編集状況についての各報告があり、第一回総会・研究集会の日程・内容等について検討を行なった。また、会員問題について、小委員会の提案をもとに議論が交わされた。

木簡学会役員（一九九三・九四年度）

幹事長	高橋	信也	久
副会長	早川	庄八	狩野
委員長	綾村	宏	綾村
監事	鬼頭	清明	鬼頭
幹事	館野	和己	館野
幹事	原	秀三郎	原
幹事	山中	敏史	山中
幹事	清水	今津	清水
幹事	森	勝紀	みき
幹事	土橋	篠山	篠山
幹事	公草	晴生	みき
幹事	吉川	柳木	柳木
幹事	真司	八木	八木
幹事	西山	鈴木	鈴木
幹事	良平	景二	謙周
幹事	渡辺	和田	和田
幹事	見宏	充	萃
幹事	吉川	吉田	吉田
幹事	良平	南	南
幹事	渡辺	東野	治之
幹事	見宏	石上	英一
幹事	吉川	栄原	永遠男
幹事	良平	町田	章
幹事	渡辺	町田	章
幹事	見宏	佐藤	元一
幹事	吉川	永田	鎌田
幹事	良平	松下	英正
幹事	渡辺	和田	宗諱
幹事	見宏	正司	正司
幹事	吉川	幸	幸
幹事	良平	浩幸	浩幸
幹事	渡辺	義則	義則

PROCEEDINGS OF JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 15 1993

CONTENTS

Foreword	HAYAKAWA Shōhachi.....	i
Wooden Tablets Excavated in 1993	1	
Outline		
Explanatory Note		
Nara Capital Site, Nara Prefecture ; Remains of Nara Capital Eastern 3rd Wr ^d on 3rd Street, Nara Prefecture ; Remains of Nara Capital Western 2nd War on 3rd Street, Nara Prefecture ; Fujiwara Palace Site, Nara Prefecture ; Remains of Fujiwara Capital Western 4th Wr ^d on 5th Street, Nara Prefecture ; Remains of Fujiwara Capital Western 4th Wr ^d on 5th Street, Nara Prefecture ; Remains of Tangiri, Nara Prefecture ; Nagaoka Capital Site, Kyōto Prefecture ; Nijōjō Castle Site, Kyōto Prefecture ; Toba Palace Site, Kyōto Prefecture ; Remains of Nakakaidō, Kyōto Prefecture ; Shōryūji Castle Site, Kyōto Prefecture ; Ōsaka Castle Site, Ōsaka Prefecture ; Ōsaka Castle Town Site, Ōsaka Prefecture ; Remains of Kire-Higashi, Ōsaka Prefecture ; Hirano Town Site, Ōsaka Prefecture ; Remains of Uetsuke, Ōsaka Prefecture ; Remains of Hakaza, Hyōgo Prefecture ; Remains of Kamota, Shiga Prefecture ; Remains of Rokudai-B, Mie Prefecture ; Anyōji Temple Site, Mie Prefecture ; Remains of Miyanonishi, Mie Prefecture ; Akahori Castle Site, Mie Prefecture ; Remains of Kajiko, Shizuoka Prefecture ; Remains of Nihonyanagi, Yamanashi Prefecture ; Remains of Ninomiya-Miyahigashi, Gunma Prefecture ; Remains of Anyōji-Morinishi, Gunma Prefecture ; Remains of Serada-Suwashita, Gunma Prefecture ; Remains of Kochaen,		

Fukushima Prefecture; Remains of Banshōchi, Fukushima Prefecture; Zuiganji Temple Site, Miyagi Prefecture; Remains of Hachimanbayashi, Niigata Prefecture; Remains of Ayanomae, Niigata Prefecture; Remains of Banba-Tenjingoshi, Niigata Prefecture; Remains of Inui, Ishikawa Prefecture; Remains of Miyanaga-Hojikawa, Ishikawa Prefecture; Remains of Kitatakagi, Toyama Prefecture; Remains of Yamasaki, Hiroshima Prefecture; Remains of Nakasimada, Tokushima Prefecture; Remains of Kumekubota-Morimoto, Ehime Prefecture; Kanzeonji Temple Site, Fukuoka Prefecture; Remains of Wakidō, Fukuoka Prefecture; Remains of Jōbaru-Minami, Saga Prefecture; Proposed Site of Tsumakita-Elementary School, Miyazaki Prefecture	
Wooden Tablets Excavated before 1977 (15)	133
Ruins of Land Lord Asakura in Ichijōdani, Fukui Prefecture; Kusado-Sengenchō Site, Hiroshima Prefecture; Nagaoka Palace Site (31st, 32nd Excavation), Kyōto Prefecture	
Wooden Tablets and the Administration of Kuni (國) and Gun (郡)	KATO Tomoyasu..... 145
Wooden Tablets Discoverd in the granary in Kanoseyama, Kyōto Prefecture	TANAKA Jyunichirō..... 181
Bibliography No. 11—No. 15	

Published by
**JAPANESE SOCIETY
 FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS**

印 刷
編集発行
奈良市三条町二丁目九番一号
奈良国立文化財研究所
綾村 宏 氣付
木 简 学 会付
会長 寺野 久会付
TEL (073) 三四一三九三一
振替口座 京都 ○一五一二七一
京都下京区油小路弘光寺上ル
TELE (073) 三五一一六〇三四四社

一九九三年十一月二十日 印刷
一九九三年十一月二十五日 発行

ISSN 0912-2060

ISSN 0912-2060